

学会ニュース

目次

・ 第30回大会について	1
・ 共通論題「18世紀のオペラへ：コンテクストの側から」 テーマ設定について	松田聡 2
・ 事務局より	6

第30回大会について

第30回大会は、来る6月21日（土）、22日（日）に、大分大学、旦野原（だんのほる）キャンパスで開かれます。開催校責任者は、松田聡会員です。詳細は同封いたしました大会プログラムまたは学会ホームページの「最新情報」（「第30回全国大会について」）をご覧ください。5名の会員が自由論題で発表され、また共通論題『18世紀のオペラへ：コンテクストの側から』（コーディネーターは松田聡会員）では4名の方がご報告くださいます。また、大分関係の特集として「『耶馬溪』変奏曲」（コーディネーターおよび司会は高橋博巳会員）、そしてコンサートとして「16～18世紀のビウレラ／ギター音楽と声楽」も予定されております。今年もまた、多彩で充実した企画の用意された大変興味深い大会となっております。多数の皆様の参加をお待ちしております。

学会期間中に小さなお子様をお持ちの会員の皆様がより参加しやすくなるようにと、会期中に会場近くの一時的託児所をご希望の会員に斡旋し、託児料の半額を援助する予定になっております。詳しくは大会プログラム（このプログラムは学会ホームページの「最新情報」（「第30回全国大会について」）にも既に掲載されております）をご参照下さい。

また、大会の円滑な運営と主催校の負担削減のために、本年度から大会参加費を頂くことになりました。参加費は、会員は500円（但し学生会員は無料）、非会員の方は1000円（大会関連資料の他に学会『年報』をお配りいたします）となっております。何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

共通論題「18世紀のオペラへ：コンテキストの側から」 テーマ設定について

松田聡（大分大学）

河合祥一郎氏の近著『謎ときシェイクスピア』を読んで、次の文章に目がとまった。「そうしたエリザベス朝演劇の実態を知ることは、今後のシェイクスピア研究に欠かせないものとなるだろう。エリザベス朝演劇からシェイクスピアだけを取り出すのではなく、全体を見渡す視野を持たなければならない」（231 f）。シェイクスピア研究においても、こういう指摘がなされているところに、強く興味を惹かれる。というのも、私が専門とするモーツァルトでも、同じことが言えるからである。オペラに限定すれば、「ヨーゼフ二世時代のオペラからモーツァルトだけを取り出すのではなく」と、言葉を置き換えてもよい。こちらの研究領域においても、「全体を見渡す視野」を持つことが、やはり必要となっているのである。

今回の共通論題のテーマに「コンテキスト」という語を用いた背景には、そのような現状認識がある。「18世紀のオペラ」すなわち「モーツァルトのオペラ」ではないことは言うまでもないが、しばらくこの作曲家を例として、私自身の研究をもとにエッセイを綴るのを、お許しいただきたい。

大分大学に赴任した2000年の頃、私は、18世紀後半のウィーンにおけるオペラ公演を対象とする研究に着手した。ドロシア・リンクの『モーツァルトの時代のウィーンにおける宮廷劇場』（1998年）という、ちょうど出たばかりの研究書に載せられた、詳細かつ包括的な公演日程表が主要な情報源である（この好著が出されたこと自体、後述の学問状況を物語っている）。その結果、例えば《フィガロの結婚》の初演時の上演状況について、それまでとは異なった視点から見られるようになった。やや細かくなるが、簡単にご説明しよう。

この時代のウィーンでは、イタリア・オペラは、復活祭明けから翌年の四旬節前までの約10ヶ月にわたるシーズンを通して、ブルク劇場において上演されていた。1週間のうちの3日間、月、水、金曜日が公演日であり（他の4日はドイツ語演劇が上演された）、いわゆる「レパートリー・システム」により、常に複数の演目が並行して舞台にかけられていた。

《フィガロの結婚》の初演されたシーズン（1786/87年）は、イタリア・オペラ公演が復活して4シーズン目にあたる。ここに至るまでの間、宮廷の劇団はレパートリーを徐々に蓄積していった。主だったものには、最初のシーズンに移入された2つの人気作、サルティの《漁夫の利》とパイジエッロの《セビーリャの理髪師》、2シーズン目、パイジエッロがロシアからイタリアに帰る途上に作曲した《ヴェネツィアのテオドーロ王》、その次のシーズンに、宮廷作曲家サリエリがようやく成果を挙げた《トロフォニオの洞窟》がある。3シーズン目には、また、英国のステューヴン・ストーラスやスペインのマルティン・イ・ソレルといった新進の作曲家も新作を発表し、ウィーンにおけるオペラ制作は、いよいよ活況を呈してきた。

そして、4シーズン目、こういったレパートリーが引き続きコンスタントに上演され、演目全体の数がかつてないほど多くなった中、《フィガロの結婚》は初演されたのであった。このオペラのシーズン中の上演回数を「たった9回」と言うてはいけなかった。このシーズンでは、むしろ多いほうだったのである。

しかし、モーツァルトのオペラも含め、多くのレパートリーが、その1786/87年限りで舞台から消えた。その原因は、シーズン終了後、ソプラノ歌手ナンシー・ストーラスがウィーンを去ったことであろう。彼女は、4シーズンにわたって活躍してきており、多くのレパートリーで主役を歌っていたからである。とくに《フィガロの結婚》にとって、初演の舞台でスザンナという難役を演じたストーラスを欠くことになったのは、痛手だったにちがいない。このオペラが、しばらくウィーンで上演されなかったのは、よく言われてきたように、マルティン・イ・ソレルの第2作の人気に押されたから、というより、むしろ、ここに大きな要因があるのではないか……。

打ち切りの要因を断言するのは差し控えるが、《フィガロの結婚》の初演されたシーズン、演目の数がピークに達し、それがシーズン終了後、歌手の退団に伴って大幅に入れ替わったのは統計的な（しかし、知られていなかった）事実である。モーツァルトのオペラの成立事情や上演状況も、このような公演全体のダイナミズムの中で理解しなくてはならない。それが分かったのが、最大の収穫であった。

それにしても、このシーズンのブルク劇場におけるオペラ劇団の活動には驚かされる。レパートリーの十分な蓄積があるにもかかわらず、月ごとに新たな演目を導入するペースは崩しておらず、多いときにはひと月に10もの演目を舞台にかけている。しかも、《フィガロの結婚》初演の半月後から約1ヶ月にわたっては、それと並んで離宮ラクセンブルクで

も公演を行った。そういった活動を可能にする、あるいは必要とする社会のあり方全般へと、関心は向かわざるをえない。

ただし、ウィーンのあり方を一般化してはなるまい。例えば、イタリアの諸都市を基準にみれば、季節を問わず「レパートリー・システム」によって公演がなされているのも、オペラ・ブッフアばかりが上演され、オペラ・セリアもバレエもなかったのも、特異な状況といえる。では、当時のヨーロッパの中で、ウィーンとはどのような都市だったのか。――要するに、「全体」をより広く捉える必要を痛感しているのである。

狭い個別例から離れよう。コンテクストの重視は、音楽学の世界では、1990年代に加速度的に顕著になった傾向といってよい（その点、やはりモーツァルト関連だが、1989年に出された画期的な著作、ニール・ザスラウの『モーツァルトのシンフォニー：コンテクスト、演奏実践、受容』〔邦訳は磯山雅氏の監修・訳により2003年刊行〕の副題が示唆的である）。従来の「大作曲家中心」「作品中心」の研究のあり方が鋭く批判され、「音楽社会史」的な傾向が強まったのが、90年代であった。

その動向に即した優れたオペラ史の書物に、ロジャー・パーカー編『オックスフォードオペラ史』（原著1994年、邦訳1999年）がある。その邦訳の「監訳者の序文」において、大崎滋生氏はこう述べた。「オペラを扱うとき、その社会性とか、音楽外的な要素は本質的である。〔中略〕オペラの歴史を論じようとする、ヨーロッパ社会そのものを論じなければならなくなる」(6)。オペラは音楽学の領域にとどまる研究対象ではない、という指摘である。もちろん、「ヨーロッパ社会そのもの」が簡単に論じられるはずもなく、オペラは、いまだ学際的な歴史研究の沃野である。

とりわけ18世紀は、他の時代にまして、オペラがヨーロッパ社会の中で重要な位置を占めていた。上述のウィーンは、その一例に過ぎない。そういった時代を理解するために、オペラは重要なカギとなるであろう。日本18世紀学会における共通論題のテーマにオペラを選び、コンテクストの側からアプローチしようとする所以である。

基調報告をされる森泰彦氏は、1999年の共通論題において、すでに、本学会が扱うべき対象としてオペラを挙げておられる。今回も、企画の最初の段階から協力を賜った。音楽史や文学史におけるオペラ研究の問題点や、学際的な研究の可能性について、掘り下げてくださるはずである。

続く第2、第3報告では、先ほどの大崎氏の文章の語句を引き合いに出せば、オペラの「社会性」や「音楽外〔および文学外〕的な要素」に、あえて目を向ける。山田高誌氏には、ナポリという社会の中でのオペラ興行について、浜中康子氏には、舞踊という身体的、視覚的表現について、語っていただく。そして、オペラ研究そのものを相対化し、研究の方法論自体を議論の対象とするために、歌舞伎をテーマとする第4報告を古井戸秀夫氏にお願いした。

できるだけ多様なコンテキストを取り込めるよう心がけてのコーディネートである。参加者の皆様が、いずれかの報告を糸口にして、ご自分の関心をオペラに結びつけてくださり、共通論題が活発な議論と有益な情報交換の場へと発展していくならば、企画の責任者として、それに勝る喜びはない。

事務局より

メールアドレスが変わりました

日本18世紀学会のメールアドレスが変わりました。今後のご連絡は下記へよろしくお願いいたします。連絡先：jsecs@nifty.com

国際18世紀学会執行委員会報告について

昨年モンペリエでの国際学会執行委員の議事録邦訳を学会のホームページに掲載いたしました。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願いたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。

住所不明の方々の情報提供のお願い

以下の方々の住所・連絡先が不明です。ご存じの方がいらっしゃいましたら、お手数ですが事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

三浦義章 山口俊治 浜名優美 藤原浩一 横山義志 真下恭子 吉田耕太郎

お詫びと訂正

前号(56号)の学会ニュースで今号でご紹介した新入会員3名と中山智子幹事のお名前の記載漏れがございました。ここにお詫びと共に訂正をいたします。

幹事会メンバー：安西信一（常任幹事、年報担当）、井田尚（常任幹事）、伊東貴之（常任幹事）、岩佐愛（常任幹事、年報・書評担当）、王寺賢太、小田部胤久（代表幹事）、笠原賢介（常任幹事、会計担当）、金沢美知子（常任幹事）、川島慶子、小穴晶子（常任幹事、年報・業績欄担当）、高橋博巳（東アジア交流担当）、寺田元一、長尾伸一、中山智子、馬場朗（常任幹事、庶務・学会ニュース担当）、堀田誠三、増田真（国際幹事）

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第57号 2008年4月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室

e-mail: jsecs@nifty.com

fax: 03-5841-8958

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>